



足元の「戦争」を掘り起こす

戦跡考古学が問う、 記憶の継承と市民の役割

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワークの取り組み

(※写真) 戦時中、日本陸軍最大規模の火薬工場だった東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所の変電所跡 (熊本県荒尾市)

戦後80年という大きな節目を過ぎ、戦争体験者が少なくなる今、私たちは「戦争の記憶」をどう引き継いでいけばよいのだろうか。地域に残された戦争遺跡(戦跡)を保存し、語り継ぐこと。その意義は、単に古い建物を維持管理することではない。

かつて軍都と呼ばれた熊本で戦跡の調査・保存を行う市民団体「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク(くまもと戦跡ネット)」の取り組みを昨年10月に取材した。

熊本県内を中心に、埋もれかけた地域の歴史を掘り起こす市民団体・くまもと戦跡ネット。代表の高谷和生たかたにかずおさんは、文献資料だけに頼らず、現地を徹底的に歩き、残された遺構や遺物そのものを科学的に分析する「戦跡考古学」の方法を用いて活動を続けている。公的な記録からこぼれ落ち、開発の波に飲まれようとする戦争の痕跡。それを食い止め、確かな事実として残そうとする高谷氏たちの活動現場を歩いた。

**住宅地の庭先に眠る
大浜飛行場の記憶**

「これが大浜飛行場の正門です。この安山岩の門柱、よく見てください。『軍』という文字が書いてありますでしょう。これが陸軍省の用地だという境界なんです」

高谷さんが指差した門柱には、かつて木製の扉を開閉していた金具の跡が生々しく残る。ここはかつて、福岡の太刀洗陸軍飛行学校の分校「玉名教育隊」として建設された飛行場だった。滑走路が短かったため大型爆撃機の出撃拠点とはならなかったが、沖繩戦の時期には、特攻隊が中継した場所でもある。

住宅地の庭先に眠る 大浜飛行場の記憶

熊本市から北へ車を走らせ、玉名市に入ると、のどかな田園風景と住宅地が広がる。市民マラソンのコースにもなっているという生活道路の脇に、唐突に古びた石柱が現れた。

「熊本の場合は、ここから直接



【関係地図】



特攻機が飛んだわけではありませ
ん。沖縄特攻の『義烈空挺隊』は、
直接健軍飛行場から出撃しまし
たが、玉名をはじめ多くの熊本県内
の多くの陸軍飛行場は、中継地と
して使用され、知覧や万世の最前
線基地に飛ぶんです」
門柱を過ぎて敷地内だった場所
へ入ると、そこは完全に現代の住
宅街へと変貌していた。しかし、
高谷氏の視点は違う。
「あそこの民家を見てください。
庭先にコンクリートの塊があるで

しょう。あれは格納庫の基礎なん
です。言ってみれば、『我が家の
庭先に格納庫の基礎があります』
みたいな状態で、基礎の上に現代
の住宅が建っているケースも見ら
れます」
民家の土台として、かつての軍
事施設の残骸が今も機能してい
る。巨大な記念碑があるわけでは
ない。しかし、日常の風景の中に
静かに、しかし確実に戦争が横た
わっている事実にはハッとさせられ
る。高谷さんが言う「地域の戦争

の実相」とは、こうした生活の足
元にある痕跡から始まるのだ。

修学旅行は、学びの旅
「ダークツーリズム」

なぜ高谷さんは、こうした生活
の足元にある痕跡にこだわるの
か。そこには、現在の平和教育に
対する危惧がある。学校教育では
長崎や沖縄への修学旅行が定番と
なっているが、自分たちが住む足
元の歴史を知らなければ、単なる
観光旅行で終わってしまうと高谷

さんは指摘する。

「いくら東京大空襲や沖縄の地
上戦、長崎や広島への被爆の被害が
あっても、地域の中に残された
『戦争の傷跡』を調べないと、み
んな『他人ごと』となってしまう
んです。子どもたちが修学旅行
で長崎に行っても、事前の学習が
なければ『大変だったね』で終
わっちゃう。『地域の戦争の実相』
をやっぱり沖縄や長崎に繋げない
と、中学生が沖縄に行っても『美
ら海水族館のジンベエザメが大き

民家のすぐ脇に残る大浜飛行場正門跡に
ついて説明する高谷さん（玉名市）



道路を挟んだ反対側には、陸軍省用地の
境界を示す標柱（看板下）も残る



幹線道路沿いに野ざらしで残る荒尾二造の排水路跡を案内する高谷さん（荒尾市内）



左がレンガ製、右が陶製の排水路跡



そのまま出ちゃうので、有明海の魚が死滅したんです。それではないかんということで、専用の排水路を作ったんです」

有明海まで約3キロメートル。公害を防ぐために建設された専用水路は、国道やJRの線路の下を潜り抜け、海まで続いていた。高谷さんは、並行して走る2本の水路の材質の違いに注目する。

「私の専門は考古学だから、こういう物は何かを必ず反映するので見逃しません。そうするとこちらには陶製の焼き物なので対酸性度は強いですよ。で、逆の方はレンガなので、そうでもないんじゃないかなと。物は事実を語りますから」

かった』って喜んで帰ってきてしまふ。そういった学習をやっばりしなきゃいけないんです」。修学旅行はまさに「学びの旅」で、人類の過ちを知る「ダークツーリズム」なのです。

巨大軍事工場・荒尾二造の「光と影」

次に向かったのは、福岡県大牟田市と隣接する荒尾市だ。かつて三井三池炭鉱の石炭産業で栄えた

この地には、戦時中に火薬・爆薬の製造拠点として約100万坪という広大な敷地を持つ「東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所（通称・荒尾二造）」があった。現在は名産

である「新高」などの梨畑が広がるのどかな丘陵地帯だが、その土の下には、当時の高度な土木技術と、軍需生産がもたらした環境汚染の歴史が眠っている。

高谷さんが案内してくれたのは、かつての工場の敷地から海へと続く、長い「排水路」の跡だった。「創業当初の頃は、この増永川

という小さな川に直接流していたら、そのまま酸性の強い汚染水が

より強い酸性の廃液は陶製の管で、それ以外の廃液はレンガの管で流す。水路の材質の違いは、当時の軍がいかほど危険な薬品を扱っていたかという「事実」を無言のうちにも伝えている。さらに海岸近くには、廃液に石灰を投入して中和するための巨大な「溜め枡」も残っているという。

三池炭鉱の坑口の一つ、万田坑などの世界遺産（明治日本の



産業革命遺産」は、近代化の『光』の部分です。その一方で『影』の部分を実はあって、その石炭を原料にして火薬や毒ガス弾に使うため推進薬を作っていた。人間の営みというのは単純なことではあり

ません。そうした光と影の部分を多角的に見なければいけません」

消されかけた変電所と市民の役割

排水路の周囲には住宅街が広

がっているが、約30棟の火薬庫が今も点在する。所有する企業や個人の理解を得ながら保存されており、一部は車庫としても利用されている。さらに市営住宅の奥を進むと、崖にへばりつくような大きなコンクリートの

へ送電していた心臓部だ。しかし数年前、この建物は存続の危機にあった。所有者である財務省（九州財務局）が「競売」の看板を立て、民間に売却しようとしたのだ。

「リーフレットの表紙の写真にある看板、これは財務省が立てた『競売』の看板なんです。『いくらなんでもこれを売るなんてあり得ないでしょう』と。看板が出た時、財務省は『もうタイムリミットです』と言い、荒尾市側も『自分たちだけでは価値が判断できない』と及び腰でした」

そこで動いたのが、地元住民らでつくる「荒尾二造市民の会」のメンバーたちだった。彼らは財務省と荒尾市の間に入り、調整役となつて奔走した。この建物が持つ歴史的価値を市議会や行政に説き、署名活動を展開。その結果、荒尾市による用地の買い取り（公有地化）が決まり、破壊を免れたのである。

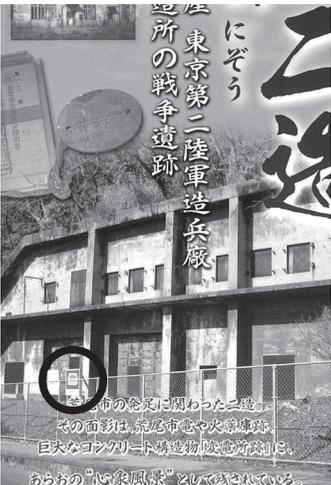
市民団体の粘り強い働きかけがなければ、この巨大な「影」の証人は、看板一枚であつてなくなってしまう。飛ばされ、永遠に失われていたただ通じて火薬工場



荒尾市が2013年に財務省から取得した東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所の変電所跡（荒尾市内）



GHQによる接收を示す「Transformer station (変電所) 284 (接收番号)」(枠内)と書かれた壁面



財務省の競売看板(枠内)が立てられた当時の写真が表紙に使われているリーフレット(※拡大掲載)



住宅地に残る荒尾二造の旧火薬庫群。

【右上写真】宅地開発によって壁面がむき出しのもの

【右下写真】駐車場として利用されているものもある

【上写真】別の地域住民の駐車場となっている旧火薬庫の内部。頑丈なコンクリートの天井が当時のまま残る



立ちほだかる「行政の壁」と「歴史認識」

なぜ、ここまで市民が動かねばならないのか。そこには、戦争遺跡特有の「行政の壁」と「歴史認識の壁」がある。

高谷さんが指摘する最大の問題の一つが、国による情報の「黒塗り」だ。地下壕などのデータは、かつて鹿児島県で起きた事故（05年に壕内で遊んでいた中学生が酸欠死し、国に賠償命令が出た事例）をきっかけに、責任回避のために非公開とされるようになった。

「国交省が出した特殊地下壕の調査データというのは、詳細な所在地や地下の構造は全部黒塗りで出るんです。そうすると、探る手立てはもう、自分たちでやるしかありません。県内のデータを全部取り寄せて、900例ぐらいをチェックして、あとはもう『ローラー作戦』で1個ずつ現地を確認していくんです」

さらに、イデオロギーの問題も避けて通れない。戦跡のあり方をめぐって「英霊顕彰」か「反戦平和」か。戦争を語る場合は、常に対

立に晒される。

「被害と加害を正面切って議論をしたら歴史感の対立にしかならない。各団体の考え方が違うわけだから。そうするとやっぱり『事実』なんです。『歴史事実がどうだったのか』ということをしつかり押さえることが大事なんです。そこをベースであれば、歩み寄れるんです」

「国の方針がない」は
言い訳にならない

高谷氏が活動の中で痛感しているのが、戦争遺跡の保存・指定に対する自治体ごとの「温度差」だ。

福岡県のように県レベルで悉皆調査（※全体をものなく調査すること）を行い、数千件規模のリストを作成して保護に取り組む自治体がある一方で、熊本では県レベルでの悉皆調査は行われていないのが現状だ。一部の市町村が独自に調査や保存へ動く一方で、多くの自治体は消極的だ。その際、担当者が口にする常套句がある。「国の方針が決まっていないから、動けない」

しかし、これは事実ではない。



文化庁はすでに1998年の通知

などで、戦跡を含む近現代の遺跡
についても地域にとって重要なも
のは保護の対象とする方針を示し
ており、2024年の報告書でも、

改めてその重要性和保護基準の考
え方を明確に打ち出している。国
の方針はすでに「ある」のだ。そ
れにもかかわらず現場が動かない

のは、開発との調整や所有者への
対応といった手間を恐れる「事な
かれ主義」や、担当者の認識不足
が根底にあるのではないかと、高
谷さんは指摘する。

戦後80年が過ぎ、当時の建物や
遺構は老朽化し、開発によって急
速に姿を消しつつある。何がどこ
に残っているのかさえ把握されな
いまま破壊される戦争遺跡も少な
くない。高谷さんは、戦跡の保存・
活用の議論を始める前の大前提と
して、行政による「悉皆調査」の
実施を強く求めている。

「まずは県内全域を網羅的に調
査し、どこに何があるのか、その
『実数』を把握すること。これが
なければ保存の議論も始まりませ
ん。市民団体や学術団体と連携し、
情報を公開しながら調査を進める

べきです」

市民が「魂」を入れる 継承の形

行政が及び腰になりがちな戦跡
保存において、市民団体はどうあ
るべきか。高谷さんの持論は明快
だ。

「みんな県に一つ大きなものを
求めますが、そうじゃなくて、ま
ず地域の中で小さな資料館ができ
ればいい。また、地域の資料館等
を利用して連携すれば良い」

高谷さんが理想とするのは、行
政と市民の連携と役割分担だ。土
地の買い取りや安全管理といった
ハード面は行政が担い、その中で
何を語り、どう伝えるかというソ
フト面は市民団体が担う。

「戦争遺跡としての価値という
のは、地元の人が丁寧に説明して
伝えないと、行政はなかなか判断
がつかないんです。だから、荒尾
二造の変電所跡は、市民団体が財
務省と荒尾市の間に調整役として
入って残すことができた。ただ、
荒尾の変電所も取得から10年以上
経っていますが、ただ看板を立て
て置いてあるだけで、それでは意

味がありません。『年間何人の見
学者がいて、どんな学びや感想が
あったのか、その成果を行政に対
してしっかりと問い質してほしい』
と、議会にはお願いしているん
です」

くまもと戦争ネットは、地域の
公民館や図書館を借りて、県内に
残る戦跡に関する展示を行う。学
校に向き、もんぺや防空頭巾の
実物を子どもたちに触れさせる。
そうした草の根の活動こそが、巨
大な記念館を建てることよりも、
確実に記憶をつないでいくのだと
高谷氏は語る。

「個々の市民グループはどうし

ても、自分たちの地域や活動だけ
に集中して視野が狭くなりがちで
す。だからこそ、私たちが間に
入って横の連携を作り、取り組み
を共有することで視界を広げてあ
げる。そうすると、点と点が線に
なり、活動の可能性が一気に広が
るんです」

かつての軍都・熊本の足元には、
まだ多くの戦争の痕跡が眠ってい
る。行政任せにするのではなく、
私たち市民一人ひとりがその存在
に気づき、「事実」を掘り起こす
こと。それが、80年という時
を経た戦争を「自分事」として未
来へ手渡す確かな方法なのだ。



くまもと戦争遺跡・ 文化遺産ネットワーク

熊本県内の「戦争遺産」に焦点をあて、
記録・検証を行い、戦争の実相と平和
の大切さを次世代へ継承する活動を行っ
ている市民団体。

主な活動は、県内の戦争遺跡（飛行
場跡、地下壕等）や空襲に関する現地
調査、米軍記録や写真の分析、博物館
と連携した平和展の開催、学校での出前
平和講座、啓発リーフレットの刊行など
に取り組んでいます。行政による県内の戦
争遺跡の悉皆調査が未実施である現状
を指摘し、民間としてその調査を補完し
つ、戦争遺跡を「国民の共有財産」や「歴
史事実の厳粛なる遺構」として保存・活
用するよう提言しています。

▶くまもと戦跡ネットの
WEB サイトはこちらから

